女子もふんどし姿になった相撲の授業

初めて相撲の授業を受けた、忘れられない一日の話。体育の新任教師は22歳の山田弥奈先生。先生はとても美人で、長い黒髪をポニーテールにまとめていた。

「えっと、みんな、静かにして聞いてくださいね。」弥奈先生が少し頬を染め、照れくさ

そうに言った。「今日は相撲の授業です。まずは…廻しを締めることから始めます。男子から、えっと…服を全部脱いでください。」

え？脱ぐ？ ここで？ 校庭の真ん中で？ 女子たちがすぐそこにいるのに？ 周りを見ると、クラスメイトの男子全員が目を丸くして固まっていた。隣に並んでる女子たちは興味津々な目で俺たちを見つめていた。美月は長い

髪を耳にかけ、ニヤニヤしながら「うそ、男子全部脱ぐの？ マジで？」と友達に囁き、紗季は友達と肩を寄せ合い、「え、ちょっと、めっちゃ面白そう！」とクスクス笑い、頬を少し赤らめていた。朋子は腕を組んでクールに「ふん、男子だけ脱ぐのってウケる」と余裕の笑みを浮かべ、鋭い視線で俺たちを観察。加菜子は恥ずかしそうに俯き、「やだ…見るの恥ずかしい…」と小さな声

で呟き、美咲は「え、うそ、ガチで脱ぐの？」と目を輝かせ、彩は「うわ、めっちゃ笑えるんだけど！」と笑い、結衣は「え、恥ずかしい…でも、ちょっと見たいかも…」と顔を赤らめてチラ見。他の女子たちも動揺していた。

「え、先生…本気ですか？ここで脱ぐんですか？」武が震える声で言ったけど、弥奈先生は首を振って、優しく、でもきっぱりと言った。「う

ん、そうだよ。相撲は力士はちゃんと廻しを締めるんだから。恥ずかしがらなくていいよ、みんな一緒だから。ほら、早く、準備して。」

俺は震える手でTシャツを脱ぎ、地面に投げ、次に短パンのボタンに手をかけたけど、指が震えて、なかなか外せなかった。チラッと周りを見ると、他の男子も同じで、ゴソゴソと服を脱いでいく。やがて全員がパンツ一丁

に。俺は地味なグレーのボクサーパンツだったけど、武は白いブリーフで、女子の視線が一気にそっちに集まるのが分かった。美月が「やだ、なにこのブリーフ…めっちゃダサいじゃん！」と声を上げて笑い、汗で濡れた髪を耳にかけ直し、頬が赤く染まった。紗季が「え、うそ、武、めっちゃ恥ずかしそう！」とはしゃぎ、朋子は「ふん、ブリーフダサすぎ」と冷ややかに笑い、加菜子は

「やだ…見ちゃダメなのに…」と顔を赤らめて俯き、指で体操着の裾を握りしめ、膝が震え、汗が額から流れ落ちた。たくさんの女子に注目された武は耳まで赤くして、地面を睨み、汗が顎からポタリと落ちた。

「はい、えっと…パンツも脱いでくださいね。」弥奈先生の声が少し上ずり、頬がさらに赤く染まった。「力士はパンツの上から廻しを締めな

いから。ちゃんと…。ほら、勇気を出して、ね。」彼女の声は優しかったが、逃げ場がないことを突きつけられた。

「マジかよ…これ、ガチで？」武がうめくように呟き、亮太に「なあ、お前どうすんだよ」と肘でつついた。亮太は「知るかよ！ やるしかねえだろ！」と小声で吐き捨てた。俺も信じられなかった。パンツの上からでいいと思って

た。相撲なんて、ちょっとカッコいいし、女子と一緒にやれるなら楽しいかも、なんて淡い期待すら抱いてたのに。こんな屈辱が待ってるなんて。女子たちの視線が突き刺さる中、俺は震える手でパンツのゴムに指をかけた。意を決して、グッとパンツを下ろす。